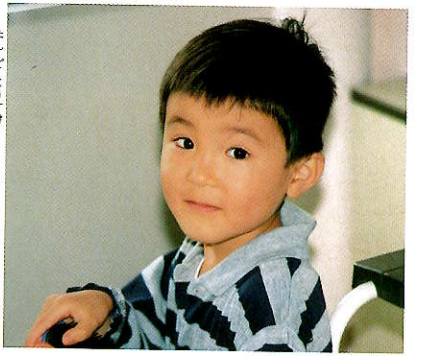


14…命のアサガオ



●丹後光祐君

丹後光祐君は、一九八六年（昭和六十一年）八月十四日に生まれました。運動が得意で、保育園のかけっこはいつも一番。お兄ちゃんと小川でナマズをつかまえ、「コシヒカリ」と名付けてかわいがっていました。コシヒカリのえさのミミズをとってきて冷蔵庫の中に入れ、お母さんをびっくりさせることもありました。

そんな元気な光祐君が、よく熱を出し、だるい、だるいと言うようになったのは、五歳の春の終わりのころでした。夏になると、よく鼻血を出すようになりました。「どこにもぶつけていないのに、どうして鼻血が出るんだろう……。」

お母さんは心配になって、病院へ連れていきました。検査の結果、光祐君は白血病と診断されました。

体の中には、血液をつくる骨髓という器官があります。その中の白血球が、がんにおかされる病気が白血病です。昔は治らないといわれていましたが、今では子どもの白血病の多くは完全に治るようになりました。主に薬による治療が行われますが、特に治りにくい場合には、健康な人の骨髓液を患者の体に入れる骨髓移植という手術を行うこともあります。

骨髓移植は、患者と骨髓液を提供する人の白血球の型が同じでなければできません。その確率はとても低く、兄弟姉妹で四人に一人、それ以外では数百人から数万人に一人といわれています。光祐君も骨髓移植をしようと、家族をはじめ「骨髓バンク」に入っている人々の血液を調べましたが、型が合う人がいませんでした。光祐君は入院して、薬による治療だけががんばることになりました。



毎日、光祐君に点滴で薬が打たれました。点滴は、病気を治す力が強い分、体に負担がかかります。はき気が何度もおそい、かみの毛はみんなぬけてしまいました。

「もう、いやだ！ うちに帰りたいよう。」
あまりのつらさに泣きだすこともありました。でも、「がんばって。ね、病気をやっつけよう。もうすぐ一年生になるんだもんね。」

と、家族のみんなにはげまされ、光祐君は八か月の治療にたえました。そして、二週間に一度は通院すること、夏休み前にもう一度入院して三か月間の治療を受けることを約束して、いったん退院しました。

四月、楽しみにしていた小学校生活が始まりました。すぐに行われた遠足では、長い入院生活のせいで体力が落ちていたため、みんなと同じ速さで歩くのが大変でしたが、光祐君は自分の足で歩き通しました。

五月の運動会では、五十メートル走に出場しました。以前はだれよりも足が速かったのに、次々と友達に追いつかれて最下位になってしまいました。それでも光祐君は、前を向いて、最後まで走りました。



それから数日後、授業でアサガオの種をまきました。学校から帰った光祐君は、お母さんにたずねました。

「今日、学校でアサガオの種、まいたんだ。いつさくのかなあ。」

「そうね、夏の花だから、夏休みに入るころには、きれいにさくわよ。」

「ふーん。夏休みか……。」

光祐君は、それきりだまりこんでしまいました。



夏が近づくとつれて、アサガオはぐんぐん成長していきました。毎日の水やりが欠かせなくなってきました。光祐君の学級では、水やり当番が休むと、必ずだれかが代わりにアサガオに水をやりました。

七月七日、予定通り再入院が決まると、学級の友達は、光祐君を勇気づけて見送りました。「光祐君、がんばってね。みんなで光祐君のアサガオにも水をやっておくからね。」

再びつらい点滴の毎日が続きます。せつかく生えそろった光祐君のかみの毛は、またぬけてしまいました。

光祐君は笑いながら頭をなでました。

「あーあ、またつるつる頭になっちゃった。」

こうして明るくがんばったかいがあって、治療は順調に進みました。

八月二十日、五日間の外泊が許されて帰宅した光祐君を、悲しい知らせが待っていました。数日前にコシヒカリが死んでしまったのです。お兄ちゃんは、学校の先生に持ってきてもらった光祐君のアサガオのはちを見せて、懸命になぐさめました。

「ほら、光祐のアサガオがさいているよ。元気になったら、またナマズをとりに行こうね。」

それから四日後、病院に帰る前日の夜、光祐君はお母さんとふろに入りました。ザブンと顔までお湯に入り、ゆつくりと顔を出した光祐君は、急にまじめな表情になってつぶやきました。

「お母さん。あのね、あのね……。ぼく……。もうすぐ、死ぬのかなあ。」

「な、何を言うの、光祐。だいじょうぶ、あと少しがんばれば、病気はよくなるわよ。」

お母さんはどきっとして、それ以上の言葉が出てきませんでした。



翌日、病院にもどり、再び治療を始めました。夏休みが終わるところから、光祐君は、学校に行く日に備えて病院で勉強を始めました。

ところが、九月に入り、とつぜん光祐君の具合が悪くなりました。高熱、げり、はき気がおそい、注射を

しても熱が下がりません。お母さんは、光祐君の手をにぎり、タオルでそっとあせをふいて見守りました。

「お母さん、ごめんね。ぼく、お母さんに心配をかけるために生まれてきたのかな。」

「何を言っているの。みんな、光祐が元気になるのを待っているんだからね！」

九月十二日。高熱が続き、夜になると、ほとんどこきゆうができなくなりました。

九月十三日午前二時四十分。七年間の短い命を精いっぱい生きて、光祐君は天国へと旅立っていきました。

——十月になれば、また学校に行けると楽しみにしていたのに……。

お母さんは、はりさけそうな心で光祐君を思いながら、ふと庭に目をやりました。そこには、あわいピンクのアサガオの花が五つ、さいっていました。お母さんの目に、なみだがこみ上げてきました。

「光祐のアサガオだ。光祐がいなくなっても、花は生きている……。」

その年の秋、光祐君のアサガオに三十つぶの種ができました。その種から翌年は二千つぶもの種が取れました。

お母さんは、その種を光祐君と同じ病気の人を救う「骨髄バンク運動」を広めるために配り始めました。

今では五十万つぶをこえたこの種は、「命のアサガオ」とよばれ、多くの人のもとで花をさかせています。



●「命のアサガオ」

1 心を動かされたのはどの場面ですか。それは、なぜですか。

2 今までに「精いっぱい生きています」と感じたことはありませんか。